

資料紹介

藤沢市 No.220 遺跡 B4 層出土の石器について

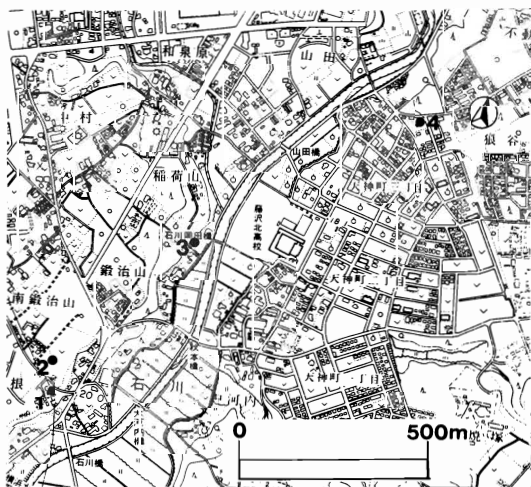
加 藤 信 夫・安 達 尊 伸

はじめに

ここに紹介する資料は、1995年10月13日に発見された藤沢市 No.220 遺跡の先土器時代の資料である。本遺跡は藤沢市石川 403-1 番地に所在し、現在区画整理のための工事が進行中である。遺物が出土した地点は既に元の地表から 4～5 m ほど削平され、高さ約 1 m の宅地に成形されていた。その南西コーナーの法面に遺物が露出しているのを発見したため、放置すると遺物が散逸する恐れがあったので簡単な調査を実施した。後に出土層位を確認したところ、B 4 層上面に位置することが判明した。県下においては B 4 層中から遺物を出土する遺跡は稀であり、本遺跡例のように石皿・磨石と考えられる石器がまとまって出土したことは、先土器時代研究にとって貴重な資料と言えよう。

1. 遺跡の位置 (第 1 図)

本遺跡は、小田急線六会駅の南西方約 1.9km の相模野台地南東部に位置する。引地川の右岸、標高約 30m の台地斜面部にあたる。古くは相模考古学会の踏査によってその存在が知られた遺跡である。北側に隣接する 2 の南鍛冶山遺跡・3 の藤沢市 No.399 遺跡とは一連の台地上に立地することになる。周辺の同時期の遺跡としては、引地川の右岸では約 600m 上流に 3 の藤沢市 No.399 遺跡が在り、B 4 層中間部より局部磨製石斧 2 点他が出土している。約 4.7km 上流には代官山遺跡が在り、B 4 層下部より錐器、剥片類が出土し



第 1 図 遺跡位置図 (1/20,000)

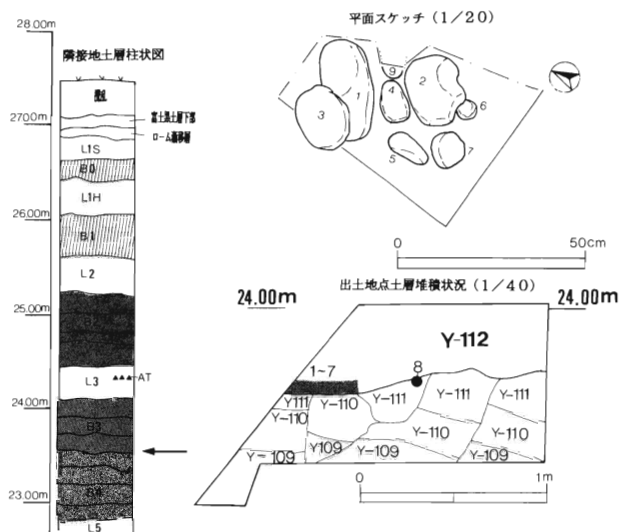
ている。約 2 km 下流の低位段丘上には大庭根下遺跡が在り、B 4 層上部よりナイフ形石器と打製石斧が出土している。本遺跡から約 1.2km 上流の左岸には 4 の藤沢市 No.269 遺跡が在り、B 3 層下部～B 4 層上部と B 4 層下部～B 5 層の 2 枚の文化層が検出され、ナイフ形石器、ハンマー・ストーンなどが出土している。

この様に本遺跡は県内でも最古段階の遺跡が集中する地域に存在している。

2. 出土状況（第2図）

遺物出土地点の法面では、立川ロームのB3層・B4層が見られB3層中にはY-112が、B4層中にはY-109～Y-111の各層を確認した。遺物出土地点は地殻変動により土層のずれが生じているが、いずれの遺物も底面がY-111の上面にのり遺物をB3層（Y-112）が覆うような状態であった。よって当時の生活面はB4層上面であると考えられる。

1～7は約50cmのせまい範囲に集中していた。特に3は1の上に立て掛けられたような状態で重なっていた。崩落による散逸の恐れのあるもののみを採取してきたため、第3図9など比較的小形の磨石と考えられる石器が3点残っているが、その内の1点も1の上ののっていた。6は2の下側の凹みに入り込むような状況であった。全容が知りえない



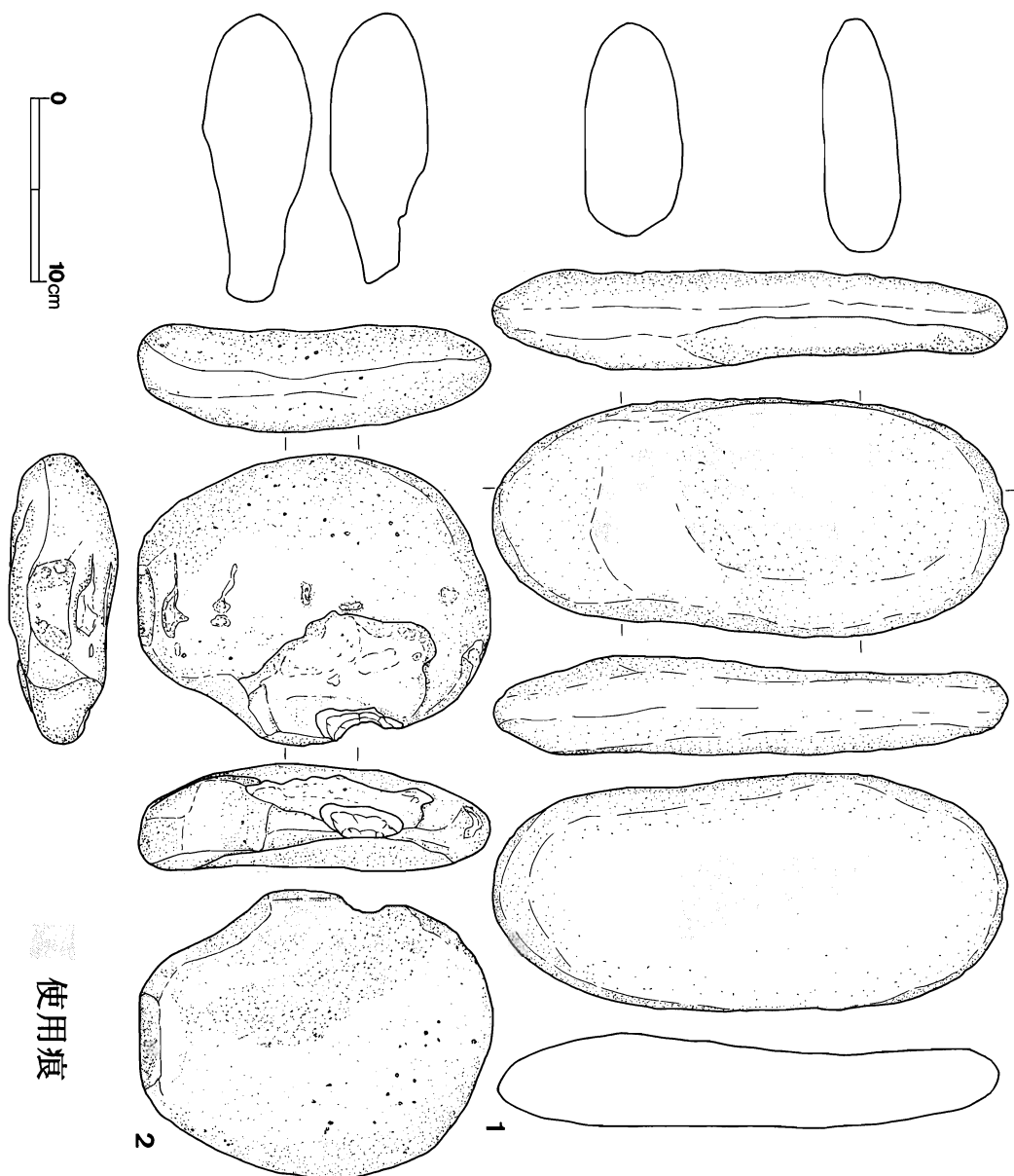
第2図 遺物出土状況

ので断言できないが、採取してきた遺物の出土状況と現地に残してきた遺物が1の上ののっていたり2の北や東に位置していたことを考えあわせると、1・2・3の石皿と考えられる大形の石器の周辺に磨石などと考えられる小形の石器が添え置かれているような状態が想定される。8のみは1～7から30cm東に離れていた。また、遺物の周辺ではその広がり等は確認していないが、同一層位で炭化物を確認した。

3. 遺物について（第3・4図）

1は今回採取した遺物のなかで最大のもので、長楕円形を呈する。実測図正面の左上半部では明瞭な磨痕等は確認できないが、広い範囲で平面半円状に緩やかに左側縁に向かって凹み薄くなっていく。その凹み部の左側縁は、他の側縁がなめらかな曲線で稜が不明瞭であるのに対し明瞭な稜をもっている。また、下半部の凹みのない厚みのある部分や裏面には、摩耗によると考えられるなめらかな面を持つ。表面は鉾物の抜けたような小さい穴が多少見られる。

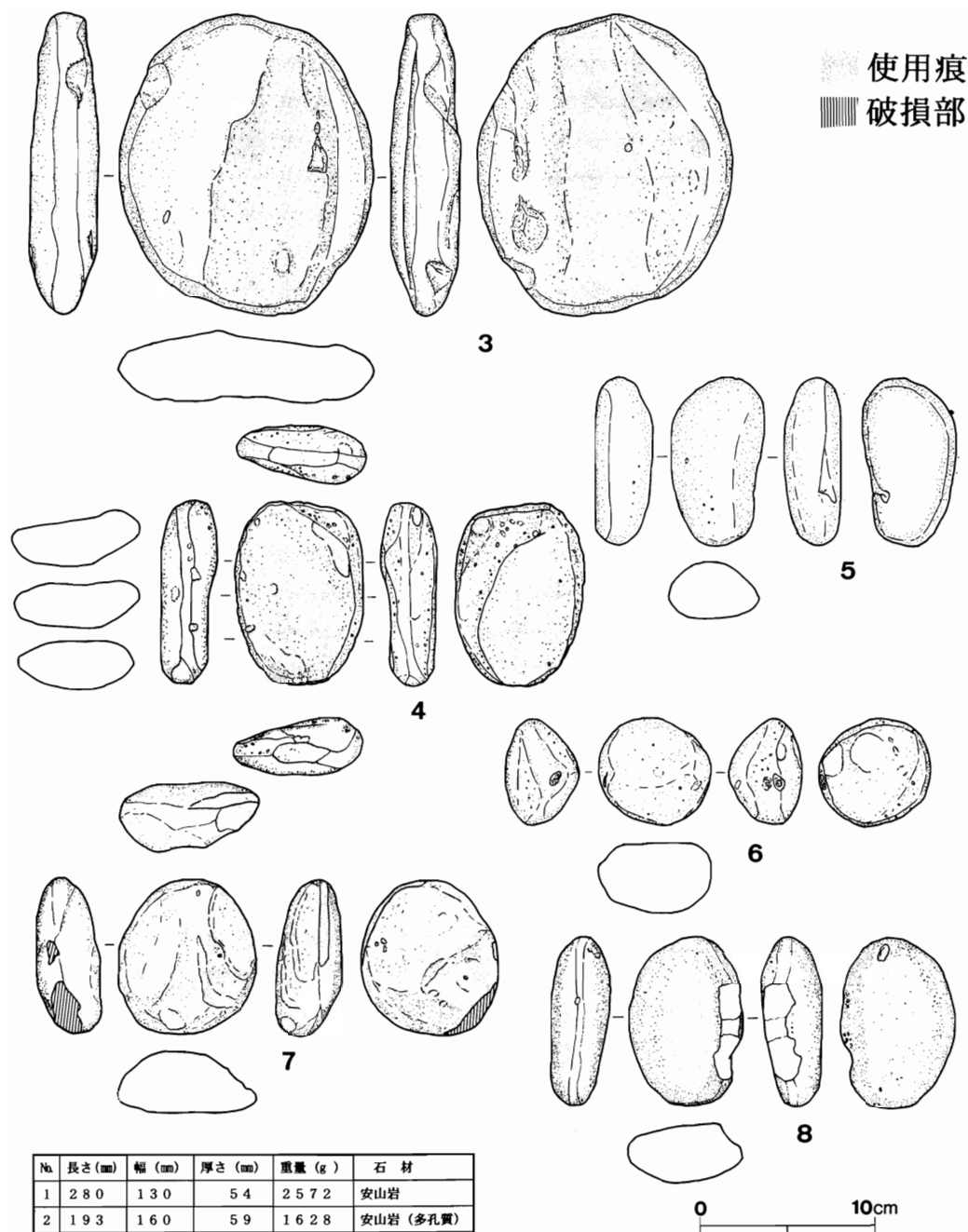
2は不整形形を呈する。表面は多孔質で非常に粗い。右側縁に剥離面を持ち、右半部には広い範囲で凹凸の激しい不自然な凹みを持つ。裏面の左半部は、側縁に向かって薄くな



第3図 出土遺物1 (1/4)

り平面が縦長で断面が弧状の凹んだ面を持つ。見た目の印象こそ異なるが、側縁に向かって不自然に薄くなる凹みの在り方は1に類似する。また、下面には幅5 cm程度の不自然な凹みを持っている。

3は板状の不整楕円形を呈する。正面右半部には、平面縦長で不整形の浅い凹みを持つ。その範囲の小さな凸状部分では非常になめらかな摩耗の痕跡が認められる。裏面も同様な



第4図 出土遺物2 (1/4)

凹みを持つ。表面は1と近似するが多少なめらかである。

4・5・6は、表面が2に類似し多孔質で凹凸が激しく線状痕などは観察できないが、4・6は摩滅したように凹凸が少なくなっている面（トーン部分）が顕著に認められ、また、4の上下面は面取りがなされていることが明瞭に観察できる。5は確実な摩耗痕は観察できないが裏面に比較的平坦な面を持っている。また、裏面下部の左側端には、剥離されたような鋭い窪みを持っている。6の両側面には小さな窪みが存在し、敲打痕の可能性もある。

7・8は、表面が比較的なめらかな材質である。7の裏面には、明瞭な磨痕が認められ右側縁に面取りがなされている。また、正面右半部には岩脈と思われる細い稜が存在するが、摩耗により非常になめらかになっている。8の右側縁には剥離痕が認められるが、風化とロームの付着により人為的なものかどうかは確認できない。正面・裏面ともに凹凸が少なく非常になめらかになっている。

出土した遺物は、いずれも磨痕・不自然な稜や凹みを有し面取りが行なわれているものも存在した。これらが、人為的なものかどうかは今後さらに検討を要するが、あたかもセット関係を示すかのような出土状態を考え合わせると、石皿や磨石のような石器として使用されたものと考えられる。また、磨石と考えられる石器は既に敲石に分類され、植物質食料の調理加工具として捉えられているが（黒坪1983・1984）、石皿はほとんど例が見られない。

おわりに

先土器時代のこのような事例は少なく、県下では大庭根下遺跡（麻生1987）・栗原中丸遺跡（大上・鈴木1984）で各1点の磨石が出土しているのみであり、また、このような出土状況を呈する例は、非常に稀でその評価の仕方によってはこれまでの先土器時代の認識を変えかねない程に重要な資料である。

最後に本資料を紹介する機会を与えて下さった編集委員の方々、上本進二、織笠 昭、織笠明子、桜井準也、柴田 徹の各氏に貴重な御教示を頂いた、記して謝意を表します。

参考文献

- 大上周三・鈴木次郎 1984 『栗原中丸遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告3
- 黒坪一樹 1983・84 「日本先土器時代における敲石類の研究（上・下）」『古代文化』35—12・36—3
- 相模考古学研究会 1971 『先土器時代遺跡分布調査報告書 相模野篇』
- 砂田佳弘・上田 薫 1986 『代官山遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告11
- 関根唯充 1995 「No.399遺跡」『藤沢市文化財調査報告書』第30集
- 戸田哲也・麻生順司 1987 『大庭根下遺跡』大庭根下遺跡発掘調査団
- 浜野洋一・上本進二・桜井準也 1996 「藤沢市No.269遺跡」『湘南考古学同好会々報 60』